（二〇一七年度）

5 国語問題（六〇分）

（この問題冊子は20ページ、三問である。）

受験についての注意

一、試験監督者の指示があるまで、問題冊子を開いてはならない。
二、試験開始前に、試験監督者から指示があったら、解答用紙の右上の番号が自分の受験番号と一致することを確認し、所定の欄に氏名を記入すること。次に、解答用紙の右側のミシン目にそって、きれいに折り曲げてから、受験番号と氏名が書かれた切片を切り離し、机上に置くこと。
三、試験監督者から試験開始の指示があったら、この問題冊子が、右に記したページ数どおりそろっていることを確かめること。
四、筆記具は、**HかFかHBの黒鉛筆またはシャープペンシル**に限る。万年筆・ボールペンなどを使用してはならない。時計に組み込まれたアラーム機能、計算機能、辞書機能やスマートウォッチなどのウェアラブル端末を使用してはならない。
五、**解答は、解答用紙の各問の選択肢の中から正解と思うものを選んで、そのマーク欄をぬりつぶすこと。**
六、マークをするとき、マーク欄からはみ出したり、白い部分を残したり、文字や番号、○や×をつけたりしてはならない。また、マーク箇所以外の部分には何も書いてはならない。
七、訂正する場合は、消しゴムでていねいに消すこと。**消しくずはきれいに取り除くこと。**
八、解答用紙を折り曲げたり、破ったりしてはならない。
九、試験監督者の許可なく試験時間中に退場してはならない。
十、解答用紙を持ち帰ってはならない。
十一、問題冊子は必ず持ち帰ること。

一

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

われわれは人間として、誰しも自らの幸福を希(こいねが)っている、われわれはまた、人間である限り、自分の幸福だけではなく、他の人びとの幸福をも希いえなくてはならない、幸福を希うということは人間存在の本質に属する、と誰しも――今日でも――いうであろう。

しかし、[1]自らの幸福を希うとは、恵みを受けいれる用意ができているということではないだろうか。「幸福である」とは、「恵まれている」こと、「恵みをうけている」ということである。私が「私は幸福だ」といいうるのは、つまり他人から見て幸福そうだというのでなく自ら幸福を体験しうるのは、ただ私が自らを恵まれたものとして見出す場合だけである。自分を恵まれたものとして自覚する可能性がある場合にのみ、人は真に幸福でありうるのである。だから幸福であることには、恵みを知ることが先立っているであろう。そして、この恵みを知ることもまた恵みによって可能なのであり、恵みの自覚は、それ自身が一つの恵みであるであろう。

あるものを希う(wünschen)ということは、そのあるものを欲する(wollen)ということと直ちに同じではない。われわれが希うものも、欲するものも、われわれがそのものを現在何らかの仕方で欠如しているがゆえにかつ欲しかつ希うのであり、その意味では、希うことのうちには、欲することが含まれているともいえる。しかし[2]希うということ、それは欲すること以上のことである。単なる欲求にあっては、それが遂げられるのであれ遂げられぬのであれ、他者の意向や意志は、それとしては顧慮されていぬであろうが、希求の対象には、何よりも他者の配慮によって成就されるということが不可欠の因子として含まれていなくてはならない。願いは聴かれ、あるいは聴かれない。[3]かなえられ、あるいはかなえられない。願いの成就は第一次的に自己以外の力、私に対する自由なる他者の配慮に依存するのである。他者の認められぬところにはそもそも願うということは成り立たぬ。他者の意志へ私の意志が合致して欠如を満たされる可能性のあるところにのみ希求、願望がありうるのである。日本語の「ねがう」は、「祈(ネ)ぐ」の延であるという。同じ言葉から出た「ねぎらう」というのは、他者の労に謝することであ

る。他者が無視されるところには、希望なるものは原理上ありえようがなく、そこにはただムキ出しの要求、裸の欲望があるだけである。単なる欲望の満足には通常 [4] は続かない。

幸福というものは、本来恵みを享(う)けることとして他者なしにはありえない。それはまた、単に欲求されるものではなく、ましてや企図されるものではなく、ひたすら願望され希求さるべきものとして、他者を抜きにしては、わが身に現に欠如していることすらも実はありえないのである。そこでもし今日の人間が、自己に対する他者をもはやもっていないとすれば、[5]今日の人間は幸福になりうる根本条件をいわば二重に欠いているといわねばならぬ。今日の人間にとって「よく生きる」ということが全然問題にならないのもそこからくる。「幸福(エウダイモニア)」と「よく生きること(エウゼーン)」とはもともと同じものであり、今日われわれが哲学をもたないのも、まず他者を失った結果なのである。「よく生きる」ということは、決して人間がただ自らの力だけに頼ってなしうることなのではない。

幸福であることはしかし、[6]実は人間なるものの義務なのである。人が他者を認め、それに向かって応答せねばならぬということは、すでに彼の恣意的(しいてき)自由の制限を意味するが、素直な応答が最もなされにくいのは、それがまさに恵まれることの応諾である場合である。恵まれた状態に身をおくということは、実は自己の劣位者の身分を認めること、身を卑しくすることにほかならない。つまり幸福は一種の負い目、したがって一種の重荷でもあるのであって、さればこそ、現代の人間がそうであるごとく、人間が幸福を希わなくなることが可能なのである。人間は、自己の恵まれてあるというその事態を否認し、お情けを蒙(こうむ)っているという状況からの脱出を企てるのである。

しかし、人はこの途(みち)によっては人間たることをやめねばならない。彼は恐らく、願望は欲求と対比する時、非実践的であり怠惰であり、空想的であるなどといい、[7]それをこの人間たることの廃棄の口実にするであろう。しかしそうではない。実は願いを、希望をもつことにまさる敢為はない。それには自己の自我を捨てる決心と行動、他者の自由を認める宏量(こうりょう)が要求されるからである。幸福は決して他から闘いとることはできない。もしも幸福のためにも闘いがあるとするならば、それはただ自分自身との闘いでのみありうる。そして、この希望のあるところにのみ人間的創造もまたありうるのである。

現代の世界では、人は幸福ではありえない。なぜなら現代の人間は、自分の手で幸福がつくり出せると思っているから。だが、もっと怖ろしいことは、彼がもはや不幸のうちに自らを見出す能力をも失ってしまっているということであろう。幸福を希わなくなった時、人間は人間たることをやめた。人は「幸福」という言葉の意味を忘れてしまった。それが希わるべきものであって、この希うという以外の仕方では本来関与されえないものであるという、この単純なことが解らなくなってしまった。最も野蛮な原始人ですら知っておったものを、今日の人間はもはや知らぬ。仕合せ、不仕合せということを彼はもはや知らぬ。

「よく生きる」ということは自力でできることなのではないとわれわれはいった。しかし実は、善くも悪しくも、人がともかく生きてありうることがすでに恵みなのだ。生命は人が自分の手で、自分のうちからつくり出したものではない。「よく」生きることよりも以前に、およそ生きうるというそのことがすでに恵みを享けてあることであったのだ。

しかし人間は、「然り」を言い「否」を言うことを許されていた。彼のみは、その然りと否とを向けるべき他者をもち、恵みを受けいれたり受けいれなかったりする能力をもっていた。われわれ人間のみは恵みをうけとるために決断をなさねばならなかった。それがまた人間のみが自殺しうる理由なのである。恵みをうけることほど容易なことはない、幸いに与かるのに躊躇する人はないという人があるかもしれない。しかしその考えは、浅薄であるのみならず間違っている。どのような恵みをでも私は素直に享けいれるといいうるためには、人間はいかにあつい信仰をもたねばならぬことであろう。「結構です」、「間にあっています」、「御親切は有難いが」といいうる時の、あの爽快さを知らぬ人があろうか。「お言葉に甘えます」といわねばならぬ時、どれほどかすかにもせよ屈辱を、少なくとも抵抗を覚えぬ人があろうか。どのような恵みをも辞退せぬほどに大いなる肯定の力が人間自身にあると考えるなら、それは人間の自惚れである。他者からの恵みを素直に享けることの不能ということは人間に特有な欠陥なのであり、そしてそれは人間のみが自らの意志によって恵みを享けいれることを許されているという特権と不可分なのである。

（森口美都男『現実』より）

〈注〉延…「延言」のこと。江戸時代の国学者の用語で、たとえば「語る」が「語らう」になること。
敢為…ものごとを思い切って行うこと。
宏量…度量が大きいこと。広量に同じ。

問一　傍線部1について、このように筆者が考えるのはなぜか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　幸福は欲求したり企図したりするものではなく、ただ希求するしかないものであり、何かを希求するということには他の誰かによる配慮に頼ることが含まれているから。

b　「幸福である」ということは「恵みをうけている」ということであり、自分が現に幸福だと自覚するかどうかにかかわらず、「恵みをうけている」ということを自覚することこそが、幸福につながるから。

c　人間は人間である限り、自分の幸福を求めるだけでなく他の人びとの幸福も希求しなければならないが、自分の幸福については実現する努力をすることができても、他の人びとの幸福はどうすることもできないから。

d　「恵みを受ける」ということは、誰かに対して負い目を負うということであり、なかなか素直に受容することができないことであるが、その考え方を克服して恵みを恵みとして受容する心構えができないかぎり、幸福にはなれないから。

問二　傍線部2はどういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　希求することは、現在欠けているものを欲求することから始まるが、欲求は他者のことを顧慮しなくても成立するのに対し、希求は他の人びとの幸福を顧慮することによってはじめて成立する。

b　希求することと欲求することは、現在欠けているものを希求し欲求するという点で同じだが、欲求することが他者の意志に直接関係しないのに対し、希求することは他者の意志に依存する。

c　希求することと欲求することは、何かが欠けているところから始まるという共通点をもつが、他者の意志は欲求を左右することがないが、希求を左右することがある。

d　欲求することは必ずしも幸福と結びついていないが、希求することはつねに幸福と結びついており、幸福が他者の意志を尊重することによってしか実現できない以上、希求することは欲求することを超えている。

問三　傍線部3はどういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　欲求は満たされたり満たされなかったりするが、願いはかなえられたりかなえられなかったりする。

b　世の中には願いをかなえられて喜ぶ人もいれば、かなえられなくて悲しむ人もいる。

c　かなえられる種類の願いもあれば、かなえられない種類の願いもある。

d　願いが成就されるか否かは、他者の自由な裁量によって決まる。

問四　空欄4に入れるのに適切な語句は何か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　感謝

b　幸福

c　祈り

d　配慮

問五　傍線部5について、このように言うことができるのはなぜか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　他者の自由な配慮を素直に受け取ることも、それに謝意を表することもできないから。

b　幸福は他者の配慮によって与えられる恵みであると同時に、他者との比較によってはじめて自分に欠けているとわかるものだから。

c　幸福は他者によって恵みとして与えられるものであると同時に、そもそも何かを希求することは他者がいることを必要とするから。

d　恵みを恵みとして自覚することも、何かを希求することをたんなる欲望から区別することも、できないから。

問六　傍線部6について、このように言うことができるのはなぜか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　他者の存在を認め、自らの恣意的な自由を制限することは人間の義務であるのと同じように、他者が自由な配慮によって願いをかなえてくれることを認めることもまた人間の義務であるから。

b　幸福であることはよく生きることと同じことであり、幸福であることが他者からの恵みとしてのみ可能であり、よく生きることが人間の義務である以上、恵みとしての幸福を受け入れることもまた人間の義務であるから。

c　幸福を希求することは、人が独力では成就しえないことがあることを認めることであり、他者の存在が必要であることを認めることであるが、他者の存在を認めることこそ人間の義務であるから。

d　自分に何かを恵んでくれる人に対して応答することは、自分を劣位に置くことであるがゆえに人間にとって難しいことであるが、そこから逃避することはすなわち人間であることをやめるということだから。

問七　傍線部7はどういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　何かを願望することはその何かを自力で実現することを放棄することだということを理由に、幸福を願望することをやめ、したがって人間であることをやめるであろう。

b　他の人びとの存在を認め、その人びとに応答することこそが人間を人間たらしめるのに、それはたんなる願望にすぎず現実味に欠けることを理由に、他の人びとの存在を認めず、応答を拒否するであろう。

c　幸福は他者から恵みとして与えられるという考えは怠惰な考え方だと勝手に決めつけ、自力で幸福がつくり出せるという傲慢な考え方に陥った結果、人間性を失うだろう。

d　他者の自由な配慮に頼って生きざるをえないことを認めることは、他者の自由を認める度量を示す積極的なことであることに気づかず、自力で幸福を求めることに専心した結果、人間の義務を果たせなくなるであろう。

問八　傍線部8について、このように筆者が言うのはなぜか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　人間は恵みを受容することも拒絶することもできる自由をもっているが、どの恵みを受け入れるかいつも迷い、その決断には勇気がいるから。

b　恵みとして与えられるものは現世的な意味で好ましいものばかりとは限らないので、すべての恵みを素直に受け入れることは普通の人間には難しいことだから。

c　恵みを与える人が真の善意をもっているかどうかは誰にもわからないので、恵みを受け入れることにはつねに賭けのようなところがあるから。

d　人間は自分の意志で恵みを受け入れたり受け入れなかったりすることができるが、恵みをありのままに承認することは人間を超えた力を必要とするほど困難なことだから。

問九　次の中から本文の内容に合致するものを二つ選べ。

a　幸福を希求することは人間の本質であると考える人は多いが、真剣に幸福になる努力をする人は少ない。

b　現代人は、幸福は他者と分かち合うことによってはじめて感じられるということを忘れているために、真の意味で幸福になれない。

c　現代人が幸福になりえないのは、他者を失っていること、そして自力で幸福を生み出せると思い込んでいることによる。

d　人間は、他者に依存したくないと言いつつ、自律的に生きる努力を怠るため、実際は他者に依存し負担をかけている。

e　人間は、他者に対して負債を負い、劣位に立つことを恐れて、幸福を希求しなくなることがある。

f　幸福を希求しなくなるということは、自己と他者の関係に無関心になるということであり、人間が人間であることをやめるということである。

g　ただ生きているということすら他者からの恵みであるのだから、結局人間には自力でできることはない。

h　恵みはひたすら与えられるものであるのに、それを自らの意志によって受け入れたり受け入れなかったりすることができるという錯覚に陥っている人間は多い。

二

次の文章は、『源氏物語』「明石」の巻の一節である。源氏は、須磨から明石の地に移り、そこで明石の君と出会うも、都へ帰ることとなる。以下は、帰京の日が迫る中、源氏が明石の君と別れを惜しむ場面である。これを読んで後の問に答えよ。

明後日ばかりになりて、例のやうにいたくも更かさで渡りたまへり。さやかにもまだ見たまはぬ容貌など、いとよしよししう、気高きさまして、めざましうもありけるかなと見捨てがたく口惜しう思さる。さるべきさまにして迎へむと思しなりぬ。さやうにぞ語らひ慰めたまふ。男の御容貌ありさまはた、さらにも言はず、年ごろの御行ひにいたく面痩せたまへるしも、言ふ方なくめでたき御ありさまにて、心苦しげなるけしきにうち涙ぐみつつあはれ深く契りたまへるは、ただかばかりを幸ひにても、などかやまざらむとまでぞ見ゆめれど、めでたきにしも、わが身のほどを思ふも尽きせず。波の声、秋の風にはなほ響きことなり。塩焼く煙かすかにたなびきて、とり集めたる所のさまなり。

このたびは立ち別るとも藻塩焼く煙は同じ方になびかむ

とのたまへば、

かきつめて海人のたく藻の思ひにも今はかひなきうらみだにせじ

あはれにうち泣きて、言少ななるものから、さるべきふしの御答へなど浅からず聞こゆ。この常にゆかしがりたまふ物の音などさらに聞かせたてまつらざりつるを、いみじう恨みたまふ。「さらば、形見にも忍ぶばかりの一ことをだに」とのたまひて、京より持ておはしたりし琴の御琴取りに遣はして、心ことなる調べをほのかにかき鳴らしたまへる、深き夜の澄めるは、たとへむ方なし。入道、えたへで箏の琴取りてさし入れたり。みづからもいとど涙さへそそのかされて、とどむべき方なきにさそはるるなるべし、忍びやかに調べたるほどいと上衆めきたり。入道の宮の御琴の音をただ今のまたなきものに思ひきこえたるは、いまめかしうあなめでたと聞く人の心ゆきて、容貌さへ思ひやらるることは、げに、いと限りなき御琴の音なり。これはあくまで弾き澄まし、心にくくねたき音ぞまされる。この御心にだに、初めてあはれになつかしう、まだ耳なれたまはぬ手など心やましきほどに弾きさしつつ、飽かず思さるるにも、月ごろ、など強ひても聞きならさざりつらむと悔しう思さる。心の

限り行く先の契りをのみしたまふ。「琴は、また掻き合はするまでの形見に」とのたまふ。女、

8 なほざりに頼め置くめる一ことを尽きせぬ音にやかけてしのばん

エ 言ふともなき口すさびを恨みたまひて、

「逢ふまでのかたみに契る中の緒の調べはことに変らざらなむ 9

この音違はぬさきにかならずあひ見む」と頼めたまふめり。されど、ただ別れむほどのわりなさを思ひむせたるも、いとことわりなり。

（『源氏物語』「明石」）

〈注〉○入道…明石の入道。明石の君の父。　○入道の宮…藤壺。

問一　傍線部1「よしよししう」とはどういう意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　思慮深そうで

b　機転がきいて

c　風情があって

d　身分が高くて

問二　傍線部2「ただかばかりを幸ひにても、などかやまざらむとまでぞ見ゆめれど、めでたきにしも、わが身のほどを思ふも尽きせず」とはどういう意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　これだけでも身に余る幸せだと思って源氏との関係をあきらめようとも思われるが、すばらしい源氏の姿を見るにつけ、自分の身のいやしさを思うと悲しみは尽きない。

b　これだけでも幸せな思い出としてこの世を捨てて出家しようと思われるが、源氏のすばらしい姿を見ると、我が身の考えの浅はかさが思い知らされ、悲しみは尽きない。

c　たったこれだけの幸せでは、とても源氏への思いを断ち切ることは出来ないと思われるが、すばらしい源氏の姿を見ると、釣り合わない我が身を思い、悲しみは尽きない。

d　わずかこれだけの幸せな日々では、とても源氏を許すことは出来ないと思われるが、源氏のすばらしい姿を見るにつけ、自分の愚かさを知らされて悲しみは尽きない。

問三　傍線部3「このたびは立ち別るとも藻塩焼く煙は同じ方になびかむ」の和歌の説明として正しくないものを一つ選べ。

a　源氏の明石の地に留まりたい思いが、煙のたなびく様にたとえられている。

b　「同じ方」とは、源氏が帰る都の方向を指している。

c　「このたび」には「この旅」と「この度」が掛けてある。

d　「このたびは立ち別るとも」とは、今回は源氏が一人で帰京することを指す。

問四　傍線部4「かきつめて海人のたく藻の思ひにも今はかひなきうらみだにせじ」の和歌の説明として正しいものを一つ選べ。

a　「海人」とは海に潜って貝などを採る女性のことで、ここでは未来の明石の君を重ねている。

b　「かきつめて」は「かき集めて」の意味である。

c　掛詞が見られるのは一箇所である。

d　源氏を恨まず信じて待とうとする明石の君の、希望を感じさせる歌である。

問五　波線部ア～エのうち、明石の君の行為ではないものを一つ選べ。

a　ア　b　イ　c　ウ　d　エ

問六　傍線部5「箏の琴取りてさし入れたり」とあるが、なぜか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　源氏が演奏する琴の音があまりにすばらしいので、入道が感に堪えず、明石の君にも琴を弾かそうと思ったから。

b　明石の君が演奏する琴の音があまりにすばらしいので、入道は感に堪えず、源氏にも琴を弾いてほしいと思ったから。

c　源氏が演奏する琴の音があまりにすばらしいので、入道が堪えられなくなって、自らも演奏しようと思ったから。

d　入道は自分が演奏する琴の音の寂しさに堪えられず、明石の君に琴を弾いてもらおうと思ったから。

問七　傍線部6において、藤壺の演奏する琴の音と、明石の君の演奏する琴の音が比較されている。二人の琴の音の説明として正しくないものを次の中から一つ選べ。

a　藤壺の琴の音は当世風で華やかである。

b　藤壺の琴は、聞いている人が、ああすばらしい、と感じ入るような演奏である。

c　明石の君の琴は、どのような人が演奏しているか目に浮かぶような演奏である。

d　明石の君の琴の音は、音色が冴えて、奥ゆかしくねたましいほど巧みである。

問八　傍線部7「この御心にだに、初めてあはれになつかしう、まだ耳なれたまはぬ手」とはどういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　入道のように、明石の君の演奏を聞き慣れた人でも初めて聞く、しみじみと美しい聞き慣れない曲。

b　明石の君のように、都から離れたところで育った人にとっては初めての心ひかれる珍しい曲。

c　源氏のように藤壺の演奏を聞き慣れた耳でさえ、初めて出会ったような感動をおぼえる曲。

d　源氏のように音楽に精通した人でも、初めて聞くようなしみじみと心ひかれる物珍しい曲。

問九　傍線部8「なほざりに頼め置くめる一ことを尽きせぬ音にやかけてしのばん」の和歌の説明として正しくないものを一つ選べ。

a　源氏の「琴は、また掻き合はするまでの形見に」という言葉を受けて詠んだ明石の君の歌である。

b　「一こと」は「一言」に「一琴」を掛けている。

c　「頼め置く」とは、源氏が明石の君を迎えに明石に戻ってくると約束したことを指す。

d　「尽きせぬ音」には、いつまでも泣くという意味が込められている。

問十　傍線部9「なむ」と同じ意味を表す語はどれか。次の二重傍線部で示したものの中から一つ選べ。

a　見る人もなき山里の桜花ほかの散りなむ後ぞ咲かまし

b　いざさくら我もちりなむひとさかりありなば人にうきめ見えなむ

c　飽かなくにまだきも月の隠るるか山の端逃げていれずもあらなむ

d　光君と言ふ名は、高麗人のめできこえて、つけたてまつりけるとぞ、言ひ伝へたるとなむ

三

次の詩文は、竹添井井という日本人が清朝末の中国を旅した際に記した日記(A)と、同地で詠んだ漢詩(B)である。それぞれを読んで、後の問に答えよ。なお、設問の関係上、返り点・送り仮名を省いたところがある。

A

黎明往浴驪山温泉。泉在県城南門外、即唐華清宮遺址。結構[1]華麗、男女異室而浴、一室在最後者、為御泓[2]。畳磚覆之、穹窿如橋。泓底敷白石、方可三十尺。[3]瑩徹可鑑、寒温適体。嘗之、略不覚臭味。余自発京[4]已月余日、客店無復設浴。面膩体垢、臭穢欲嘔。至此洗沐数次、殊覚爽快。帰客次、則紅旭初升。[5]

B

湿烟縷縷日升 X 風冷華清暁鳥悲[6]

7 最是遠来憔悴客　温泉如 Y 照二鬚眉一

（竹添井井『桟雲峡雨日記』『桟雲峡雨詩草』）

〈注〉○驪山温泉…唐の都長安の北東に位置する、驪山のふもとにあった温泉。　○泓…湯ぶね。　○磚…レンガ。
○瑩徹…輝き透き通る。　○膩…あぶらぎって汚れる。　○縷縷…糸のように長く続く。

問一　傍線部1「結構」、2「御泓」、5「客店」、6「湿烟」の意味として、もっとも適切なものを、それぞれ次の中から一つ選べ。

1　a　華清宮の美しさ
　　b　建物のつくり
　　c　温泉の程よさ
　　d　立地条件のよさ

2　a　皇帝がはいった温泉
　　b　大変に貴重な温泉
　　c　霊験のある温泉
　　d　人に隠された温泉

5
a　店舗
b　宿場
c　料理店
d　旅館

6
a　湯を沸かす薪の煙
b　熱気を帯びた大気
c　温泉から立ち上る湯気
d　浴室にこもった朝もや

問二　傍線部3「方可三十尺」の意味として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。
a　湯ぶねの深さはちょうど三十尺とみなすことができる。
b　浴場の大きさは三十尺と判断してよいであろう。
c　湯は三十尺の高さから落ちていると考えられる。
d　浴槽は一辺が三十尺ほどの大きさである。

問三　傍線部4「京」が指すところとして、もっとも適切なものを、それぞれ次の中から一つ選べ。
a　洛陽
b　長安
c　北京
d　開封

問四　傍線部7「最是遠来憔悴客」の意味として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　遠くからやって来る客人がやつれているのは、もっともなことだ。

b　もっとも喜んだのは、遠くからやって来て疲れ切った私だ。

c　最高に良いのは、旅人が遠くからあせってやって来ることだ。

d　人を悲しませるのは、遠方から絶え間なくやって来る客人だ。

問五　Bの空欄X・Yに補充する語として、もっとも適切なものを、それぞれ次の中から一つ選べ。

X　a　遅　　b　高　　c　下　　d　帰

Y　a　流　　b　鑑　　c　湧　　d　煮